

飛鳥井雅経の『百日歌合』詠^{*}

稲葉美樹^{**}

はじめに

稿者は、飛鳥井雅経の定数歌を順次読み進める作業を行っている。本稿では、『明日香井集』六二九〜七二七（注一）の『百日歌合』と端作りに記されている作品（以下、本百首という）について検討したい。本百首は「毎日一首後不見建保二年七月廿五日始之」との注記を持ち、建保二年（一二二四）、雅経四五歳の時に詠まれたことが知られる。歌合と書かれているが、他の歌人に同一の題の作は見出せず、後述するように私的な百首歌と考えられる。

本百首は九九首しか現存しない。勅撰集入集歌はない。また、『明日香井集』には重出歌が少なくないが、本百首六六八は『建保四年院百首』中の八一六と上句が一致する。

本百首は歌題に多くの特徴がある。また、『為忠家初度百首』『為忠家後度百首』と共通性をもつ作が多い、述懐歌が多い、という特徴を有するほか、本百首以前には見られなかった、子と思う歌が、一首だけではあるが見られる。述懐歌が多いことから、本百首の詠作意図を推察することができる。また、雅経歌には本歌取詠が多い、流行表現などを用いた歌が多い、という特徴があるが、本百首では、本歌取詠一〇首、本歌取とはいえないが、先行歌を念頭に詠んだかと思われる歌が一二首見られる。また、珍しい表現が三四例、

独自表現が一六例、流行表現が一二例と、多く見られる。本稿では、①歌題、②『為忠家初度百首』『為忠家後度百首』との関わり、③述懐歌、及び④子と思う歌、の四点について検討し、珍しい表現などについても適宜ふれたい。

一 歌題

本百首の歌題には多くの特徴があるので、気づいた点を列記したい。

①部立がない。

②部立はないが、いくつかのグループに分けることができる。『曙雲』（六二九）・『夜雨』（六三〇）等、天象の題のグループで本百首は始まり、『唐衣』（七二六）・『玉帯』（七二七）という衣服に関わる題のグループに終わる。グループ、及びグループ内の歌題の、配列順序が何によっているかは、多くの場合不明である。

③各グループの歌数はまちまちである。最も少ないのは、『寤鐘』（七二五）で、これは前後のグループに入れることができない。一方、最も多いのは『檜原』（六六一）から『浅茅』（六八三）の、植物に関わる題の二三首である。

④題はすべて漢字二文字である。ただしその性質は一樣ではない。

「故郷」(六四八)・「漁父」(七〇〇)などのように一語の題もあるが、「過風」(六三一)・「閑眺」(六三三・六三四)のように二つの要素をもつ、二語から成る結題というべきものが多い。また、「浜木」(七二五)は「浜木綿」を詠んでおり、統一をはかるために無理に二文字にしたのではないかと思われる。「浜砂」(六四二)も通常の表記であれば「浜真砂」であろう。

⑤一題一首であるが、「閑眺」(六三三・六三四)と「幽夕」(六三五・六三六)のみ、二首ずつ存する。その理由は不明である。

⑥他に見出せない題が多い。後代も含め他に見出せない題、後代には見られる題、ともに三十例以上存する。ただし、その中には単独でなければ見られるもの(たとえば「送年」(六三九)は、「山家送年」が『新古今集』ほか多数に見られる)もある。

本百首以前に成立した百首歌等の題と比較すると、「故郷」(六四八)・「椎柴」(六七二)が『永久百首』と、同じく「椎柴」が『六百番歌合』と、「田家」(六五四)が『堀河百首』と、「釣船」(七一二)が『為忠家初度百首』と、「囲碁」(七二〇)・「蹴鞠」(七三二)・「競馬」(七三三)が『為忠家後度百首』と一致する。

⑦あえて珍しい表記等を用いているかと思われる例もある。「倍鏡」(七一一)・「海査」(七二六)などで、「倍鏡」は「ますかがみ」を詠んでおり、「海査」の「査」は筏の意である。筏は河に浮く筏が詠まれるのが普通で、海の筏を詠む例は他に見出せない。ただし、七二六は「法の浮木」を詠んだものかと思われる。本百首中には「河筏」題もある(七二三)。また、「遊君」(七〇二)は他に例がないが、同義の「遊女」題は多い。このほか、「息石」(六四〇)は、沖の石を詠んでおり、「息」は不審である(注二)。

以上のように本百首の歌題は多くの特徴をもつが、なぜこのよう

な題を選定したのかは不明である。ただし、珍しい表現等を用いた詠が多いことと、次節で述べる『為忠家初度百首』・『為忠家後度百首』との関わりをも合わせ考えると、一つの理由としては、新奇さを求めたということが考えられる。

二 『為忠家初度百首』・『為忠家後度百首』との関わり

本百首には『為忠家初度百首』・『為忠家後度百首』(以下、『初度』・『後度』、両者をまとめて呼ぶ際には『両度』とする)と共通性を有する歌が少なくない。以下、それらについて述べて行きたい。『両度』について略述しておく、丹波守藤原為忠が、近親者や友人を集めて行ったものである。『初度』は長承元年(一一三二)ないし同三年、『後度』は保延元年(一一三五)の成立かと考えられている(注三)。参加歌人はともに八名で、為忠、その子息為盛・為業・盛忠、女婿藤原顕広とその兄忠成(『初度』のみ)、源仲正・頼政父子、藤原親隆(『後度』のみ)である。本百首と『両度』との共通性は、歌題と和歌表現の二点に分けられる。『両度』と一致する歌題から見て行きたい。

『両度』と一致する歌題は「釣船」(『初度』・「囲碁」・「蹴鞠」・「競馬」(以上『後度』)の四題である。「釣船」(七二二)は『初度』のほか、本百首以前には、治暦四年(一一六八)〈保安年間(一一二〇—一一二四)成立の『両国受領歌合』に見られ、また「つりぶね」とひらがな表記で、天延三年(九七五)二月十四日の注記をもつ『堀河中納言家歌合』にも見える。「囲碁」(七二〇)・「蹴鞠」(七三二)は、後代も含め、『後度』以外には見られない。「競馬」(七三三)は『後度』のほかは後代に見られるのみである(注四)。

そのほかに「相撲」(七二四)は、『後度』に見える「相撲節」と同義である。「相撲」題は後代の『年中行事歌合』に見えるが、「相撲節」題は他に見られない。

次に表現面で共通性を有する詠を取りあげたい。

囲碁

わたしこしもろこしぶねのなみのおとも

まだうちたえずはまのまさごは (七二〇)

うちうたずきみがてなみをしらぬまはまのまさごぞ

あやぶまれける (『為忠家後度百首』囲碁、七九八、頼政)

天暦御時、一条摂政蔵人頭にて侍りけるに、おびをかけて御
ごあそばしける、まけたてまつりて御かずおほくなり侍りけ
れば、おびを返したまふとて 御製

しら浪の打ちやかへすとまつほどにはまのまさごの

かずぞつもれる (『拾遺集』巻九、雑下、五五二)

雅経歌だけを見ると、囲碁を詠んだ歌であることがわかりにくい
が、雅経歌・『後度』の頼政歌とも、『拾遺集』歌を念頭に詠んだも
のと思われる。雅経歌は、表面ははるばるやってきた唐土船がたて
る波が、絶えず浜の真砂に打ち寄せる様を詠むが、「唐土船」は、
中国伝来の遊びである囲碁の比喩と思われ、囲碁を打つことが絶え
ることはない、という意か。ただし、「はまのまさご」は『拾遺集』
歌では賭け物の比喩であるが、雅経歌では何を指しているのか解し
にくい。

曝布

月をまつくものはたてのおりかけて

よるまでぬのをさらしなのと (七一〇)

卯の花のかきねつづきのよそめにはただぬのがほに

さらしなのと (『初度』遠村卯花、為盛、一七六)

夏はぎのをねのかきねの卯の花は夜さへ布を

さらすなりけり (『堀河百首』卯花、大江匡房、三三八)

まがふべき月なきころのうのはなは

よるさへさらすぬのかとぞ見る (『山家集』一七七)

雅経歌はこれらを念頭に詠まれたものと考えられる。夜まで布を
さらす、という発想は匡房歌、あるいは西行歌から、「ぬのをさら
しなのと」という表現は為盛歌から学んだものであろう。為盛歌
同様「更級」に「(布を)さらし」を掛けるほか、「はたて」に「機」
を掛け、「織り」とともに「布」の縁語とする技巧的な歌である。
他の三首が卯花の比喩であることが明白であるのに対して、雅経歌
が何を表現しているのかわかりにくい。しかし、実際に布を曝すと
いうことが夜行われたとは考えにくく、雅経歌も卯の花を詠んだも
のか。「くものはたてのおりかけて」は天の羽衣のことで、卯の花
の比喩としたのであろうか。そうであるとすると、雅経歌は、先述
の七二〇歌同様、単独では歌意を正確に理解できないものとなる。
ただし、幻想的な美しさはある。

遠煙

ふるさとはくもにけぶりぞたつた山

そなたのそらをとぶひのもり (六三二)

くもまよりかすかにけぶりたつた山みねのあなたに

すみややくらん

〔初度〕、深山炭竈、五四〇、顕広

「竜田山」と「煙」の取り合わせは少なく、本百首以前の例はこの一首のみである。煙が立つ理由は異なるものの、煙が「たつ」と「たつた山」を掛け、煙の立つ竜田山の遠景を詠む点は共通しており、雅経が『初度』歌を念頭に詠んだ可能性も考えられる。

このほか、『両度』と本百首とで、作例の多くない表現を用いているのは、「みなといりえ」(六四一、『初度』一九〇・『後度』二二一、いずれも仲正)・「そのふのたけ」(六七五、『後度』四六三、為忠)・「塩木」(七一七、『後度』四八八、親隆)の三例である。また、六五六の「たにのかけはし」という表現は、用例は少なくないものの、『初度』の「橋上落葉」題で忠成(四五二)・為盛(四五五)・盛忠(四五六)の三者が詠んでいることが注意される。このうち忠成歌には「杣山」が詠まれているが、本百首六五九の題が「杣山」である。

以上のことから、雅経は本百首を詠作する際に『両度』を参考としたのではないかと思われる。その理由として、二点考えられる。一点は、「表現や素材に珍奇さを求める面が強い」(注五)などと指摘される『両度』の性格が、新しい表現等を好む傾向をもつ雅経の関心を引いたのではないか、ということである。もう一点は、『初度』は為忠昇叙の後に成立したという説がある(注六)ことと関わる。次節で述べるが、本百首は昇進を願って詠作されたものと考えられるので、願いをかなえた後に詠まれた『初度』に、雅経が共通性を感じた可能性が考えられる。

なお、『両度』の題の多くが『堀河百首』『永久百首』『和漢朗詠

集』に拠っていることが論じられているが(注七)、本百首の題でこれらと完全に一致するものは多くない。前述のように「故郷」「椎柴」が『永久百首』と、「田家」が『堀河百首』と一致するほか、同じく「田家」が『和漢朗詠集』と一致し、「漁父」が『和漢朗詠集』に「水付漁父」という形で見えるのみである。ほかに、和歌表現では、前述の七一〇で影響関係が考えられ、また本百首六九五に用いられている「翁さびせん」という表現は、本百首以前には『万葉集』四一五七と『堀河百首』六一八の藤原基俊歌に見られるのみである。

三 述懐歌

本百首には述懐歌が多いという特徴がある。いうまでもなく、これは百首歌の基本的な性質ではあるが、本百首にはそれが色濃く表れており、これにより本百首の詠作意図を推定することができる。そこで、本百首の述懐歌を検討し、詠作意図について述べたい。

本百首には述懐歌と解される歌が、四〇首余存する。その内容を大別すると、①老いの嘆き・時の流れの速さを詠むもの(九首)、②沈淪を嘆くもの(二一首)、③我が身や世のはかなさを詠むもの(四首)、④行く末に対する不安、あるいは不安定な我が身を詠むもの(五首)、⑤世を恨む心情を詠むもの(八首)、⑥自負を表明するもの(三首)、⑦嘆きの理由が明確でないもの(三首)、⑧その他(二首)となる。また、述懐歌中には類似的表現を持つ歌が、複数組見られる。それらを含め、①②⑤⑥中の、特徴的な詠を取りあげ

老いの嘆き・時の流れの速さを詠むもの

往昔

いにしへにかへらぬみちのかなしきは

かさなるとしのゆくかたぞなき (六三八)

送年

おほかたはゆくもかへるもひとつにて

身にのみつもるとしのかよひぢ (六三九)

浜砂

うちよするはまのまさごのしきなみに

かぞへもあへずつもるとしかな (六四二)

「かさなるとし」「身にのみつもるとし」「つもるとし」と、類似の表現を繰り返して、年老いていく嘆きを詠む。六三八・六三九は題の制約もあり、このような内容となったかと考えられるが、当時四五歳の雅経の実感でもあろう。六四二は、つもる年を浜の真砂に喩えており、誇張が著しい。ところで、本百首には、雅経自身がほかにあまり用いていない同一歌語を繰り返している傾向もある。「浜の真砂」は六四二のほか、前節で取りあげた七二〇にも用いられているが、『明日香井集』における用例はこの二例のみである。それとは別に、六三九の「としのかよひぢ」は、本百首以前には『久安百首』の藤原清輔歌(九〇三)と『正治初度百首』の守覚法親王歌(三三三)に見られるのみで、後代の用例も少ない。

沈淪を嘆くもの

夜雨

まどのあめのうちねぬことも夢なれや

閑暁

ぬるがうちに見るを夢とおどろけば

なほながきよのあか月のかね (六三三)

麓菴

ながきよのをぐらのすそのくさのいほに

夢をはかなみとふあらしかな (六五七)

三首とも「長き夜」という表現を持つ。「長き夜」は、自身の不遇な状態の比喩と考えられる。いずれも、はかない夢と長き夜を対比させることによって、思うにまかせない状況が長く続いていることを強く主張する。ほかに「長きねぶり」(七〇七)という類似表現も見られる。『明日香井集』において、「長き夜」はほかに二例、「長きねぶり」は一例見られるが、用例の過半数が本百首に集中していることになり、意図してくり返し用いたものと思われる。六三〇の「うちねぬ」は用例が少なく、「うつつかはらぬ」は後代にしか用例がない。六五七の「をぐらのすそ」は他に用例がない表現である。

世を恨む心情を詠むもの

漁父

あびきするよにうけひかぬもろともに

うらみてもなほうらぞはなれぬ (七〇〇)

引網

あびきするあまのたくなはうちはへて

くるしきもののはてはうけくに (七一九)

釣舟

いせのうみにゆらるるふねぞあはれなる

つりするあまのうけがたきよに (七二二)

いずれも海辺の景色に寄せる述懐歌である。七〇〇と七一九では、「あびきする」という同一語を詠みこむが、『明日香井集』にこの語の用例はこの二首以外にない。二首とも、「あびきする」の語は、題との関連により選ばれたものと考えられる。七〇〇では、恨んでもやはりこの浦を離れることができないと詠むが、この「浦」は世間の比喩であり、つらいと思いつつもこの世を離れない心境を歌ったものであろう。七一九は分類②の沈淪の思いを詠んだものであるが、表現の類似によりここで扱った。上句は序詞で、「うちはへて」は「たくなは」が長く延びていることと、苦しい状況が長く続いていることを言い、「苦しき」に「繰る」を掛ける。「うちはへて」と「繰る」は「縄」の縁語。「はてはうけく」が解しにくい、苦しい境遇がずっと続いているが、さらにその果てもつらいものであろうという、悲観的な心境を表出したものか。「憂けく」という表現の用例は少なく、あるいは「世中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれる雪やけなまし」(『古今集』巻一八、雑下、九五、よみ人しらず)から学んだかと思われる。

三首に共通して「うけ」(漁に使用する「浮け(浮き)」が掛詞になっている。七〇〇では「承け引かぬ」(納得しない)と、七一二ではほぼ同義と考えられる「うけがたき」と、七一九では「憂けく」と掛けられている。

沈淪する我が身を多く詠み、世を恨む心境を表出しているが、一方で自負を示す歌も見られる。

自負を表明するもの

浜楸

さりとともとおもひこしまのはまひさぎ

ひさしきなをやなみにのこさん (六六八)

拾貝

たまひろふいそべのなみのうつせがひ

むなしきあとに名をやのこさむ (六九〇)

蹴鞠

たちなるるわが身おい木のもとごとに

さてもくちせぬ名やとまりなん (七二二)

いずれも名を残そう、あるいは名が残るであろう、と詠む。六六八・六九〇は、名を残そうとの意志を何によって持ちえているのか明白でないが、七二二は、言うまでもなく、蹴鞠の飛鳥井流の祖であるとの思いによるものである。そのことから類推すれば、前の二首は和歌での名声であろうか。しかし、これらの自負は暗いイメージを伴ったものである。六九〇は、上句は序詞で、「うつせがひ」(貝殻)が「むなしき」を導き、「むなしきあと」すなわち死後に名を残そうというものである。六六八の「さりとともとおもひこし」は沈淪している間の心境であろうし、七二二には「わが身」の「老い」が詠みこまれている。そのようなマイナスの要素を負った中で持つ自負である。

以上、本百首における述懐歌について検討してきたが、『明日香井集』下巻、雑歌の中に本百首に関わると思われる贈答歌が存する。

近衛司にてとされたけぬるよし、述懐百首におほくよみて、
 ほどなく右兵衛督になりて侍りしあしたに、同人のもとよ
 り

かしはぎにけふわかばのはるにあふ

きみが御かげのしげきめぐみに (一六三四)

返し

はるの雨のふりぬとなにかおもふらん

めぐみもしげきもりのかしはぎ (一六三五)

「同人」は藤原定家を指し、この贈答は『拾遺愚草』にも、同内容の詞書を有して収められている(二五・三一・二五・三三)。雅経は承元二年(一二〇八)二月九日に左中将に、建保四年(一二二六)三月二八日に右兵衛督に任じられている。従ってこの贈答は建保四年三月のものと思われる。この贈答の直前には『建保四年院百首』が詠作されている(注八)。「述懐百首」がこれを指している可能性も考えられ、この百首には老いを詠む歌八首、昇進の願いを詠む歌三首が含まれてもいる。その中には「春の雨に身はふりぬともみかさやまさしもは袖のぬれんものかは」(八二〇)のように、中将となつて長い年月が経過したことを訴える作も存する。しかし『建保四年院百首』は、春二〇首、夏一五首、秋二〇首、冬一五首、恋一五首、雑一五首という構成となっており、述懐歌に偏っているわけではない。応製百首でもあり、これを「述懐百首」と呼んでいるとは考えにくい。となると、『建保四年院百首』直前の百首は本百首である。本百首が「毎日一首」との注記どおり詠まれたとすると、詠作開始から三ヶ月余り後の建保二年一月上旬に完成したと考えられ、その一年余り後に雅経は右兵衛督に任じられたことになる。

これを「ほどなく」と言うことはかろうじて許されようか。以上の推測が成り立つとすれば、本百首は昇進を望んで詠作されたものということになる。前節までで指摘した新奇さを求める本百首の傾向は、その願いを印象的に訴えることを意図したものであろうか。なお、本百首中唯一の重出歌は『建保四年院百首』に見える。前述の六六八番歌であるが、『建保四年院百首』では第四句以下が「ひさしきみよをなはたのむかな」(雑、八一六)となっており、主題が異なる。重出歌というより、改作と考えるべきか。

四 子を思う歌

本百首の述懐歌にはもう一首注意すべき作がある。

杜樹

しげりゆくわがこのもとをおもふにも

あはれははそのもりのした草 (六六五)

「このもと」に「木の本」と「子のもと」を、「ははそのもり」の「はは」に「母」を掛けており、わが子を思う歌である。雅経の定数歌中で子を思う心を詠んだ作は、このほかには『建保四年院百首』中の「いまはわがこころのやみもはるにあひぬこをおもふかたのみちはまどはじ」(雑、八二四)のみである。定数歌以外では『明日香井集』下巻、雑歌に、女子の病氣と死去にまつわる作(一五九八、一六二五)が見られ、また、以下に示すとおり、嫡男教雅に関わる二組の贈答が収められている。

子息教雅をありきぞめに同人のもとへつかはしたりけるに、
手本を引出物にして、そのつつみ紙に

あとならへおもふおもひのとほりつつ

きみにかひあるしきしまの道 (二六三〇)

返し

しきしまのみちしる君にならひおきつ

すゑとほるべきあとにまかせて (二六三一)

教雅、少将になりて侍りし時、同人のもとよりよろこびつ

かはすとして

みかさやまわか葉の松にいかばかり

あめのめぐみのふかさをかみる (二六三八)

返し

としのうちにはるのひかげやさしつらん

みかさの山のめぐみをぞみる (二六三九)

いずれも前節の一六三四・一六三五と同じく定家との贈答で、『拾遺愚草』にも収められている(前者が二五二〇・二五一一、後者が二五二二・二五二三)。詠作年次は残念ながら明らかではない。教雅は、生年未詳、寛喜二年(一二三〇)三月一日没、正四位下左少将に至る。早世したらしく、知られることは多くない。久曾神昇氏は正治元年(一一九九)頃の生まれかとされており(注九)、それに従えば本百首詠作時点では一六歳となる。また、本百首詠作の四年前、承元四年(一二一〇)には次男教定が誕生しており、六六五番歌の「しげりゆくわがこのもと」はこれと関わるか。長男教雅が、任官や昇進が気になる年齢にさしかかっていること、男子が二人になったことが、このような歌を詠むことを促したのであろう

し、わが子の将来のためにも自身の昇進を実現させたいとの願いもこめられているのであろう。

まとめ

以上、建保二年に詠作された雅経の百首歌について検討してきた。本百首は端作りに『百日歌合』と記されているが、昇進を願っての私的な述懐百首であったと考えられる。また本百首には、定数歌では初めて、子を思う歌が見られる点も注意され、雅経が当時置かれていた状況を反映した作品となっている。

本百首は、歌題に多くの特徴があるほか、『為忠家初度百首』・『為忠家後度百首』と共通性を有する作が少なくないが、これらは、一つには新奇さを求めることにより生じた傾向と考えられる。本稿ではごく一部しかとりあげることができなかったが、本百首に珍しい表現等を用いた作が多いことも、これと関わっているよう。この傾向は、昇進を願う気持を印象的に表出しようとしたことから生まれ、たかと考えられる。一方で、本百首には、本稿でとりあげた作にも含まれていたように、歌意が通じにくい詠が多いという傾向も見られる。それが本百首から一首も勅撰集に入集していない理由の一つであろう。しかし、本百首詠作の一年余り後に、雅経は右兵衛督に任じられており、詠作の目的は達成されたのである。

注

- 一 和歌の引用は、本文及び歌番号とも『新編国歌大観』による。
- 二 中川英子氏『雅経 明日香井和歌集全釈』(溪声出版、二〇

〇〇年)によると、この題には異同があり、高松宮旧蔵本・天理図書館蔵本は「興石」、中川氏蔵本は「澳石」である。

三 『平安後期歌人伝の研究 増補版』(井上宗雄氏、一九八八、笠間書院、二五五ページ)、『鳥帚 千載集時代和歌の研究』(松野陽一氏、一九九五年、風間書房、一五ページ)、『為忠家両度百首 校本と研究』(平安末期百首歌研究会編、一九九九年、笠間書院、二九六～二九七ページ)など。

四 後代の家集のほか、『夫木抄』に一首(二九八六)、『題林愚抄』に三首(九九〇一～九九〇三)が、『競馬』題で収められている。『題林愚抄』の三首中二首は『後度』歌である。『夫木抄』所収歌と『題林愚抄』九九〇二番歌は、『後度』歌ではないが、『夫木抄』歌は仲正、『題林愚抄』歌は顕広の作で、ともに『後度』参加歌人である。

五 井上氏前掲書、二五七ページ。久保田淳氏『新古今歌人の研究』(一九七八年復刊、東京大学出版会)二二〇ページにも類似的指摘がある。

六 松野陽一氏『藤原俊成の研究』(一九七三年、笠間書院)など。

七 久保田氏注五に同じ、上野香織氏「為忠家両度百首について―初度百首から後度百首への展開―」(『国語と国文学』平成二年八月号)、佐藤明浩氏「『為忠家両度百首』に関する考察―

歌作の場の問題を中心に―」(『語文』(大阪大学国語国文学会) 第五七輯、一九九一年一〇月)、松野氏『鳥帚』一五ページ、三六～三七ページなど。

八 建保四年二月成立。この百首については川平ひとし氏「建保四年院百首の成立」(『私学研修』(財団法人私学研修福祉会) 一〇二号、一九八六年七月)に詳しい。この百首の雅経詠については拙稿「飛鳥井雅経の『建保四年院百首』詠」(『十文字国文』第十三号、二〇〇七年三月発行予定)で考察した。

九 『崇徳天皇御本古今和歌集』(文明社、一九四〇年)一四ページ。

* A study of Masatsune Asukai's Hyakunichi-Utaawase

* Miki Inaba (Japanese Language and Literature)

キーワード 百首歌 述懐歌 歌題 『為忠家初度百首』 『為忠家後度百首』